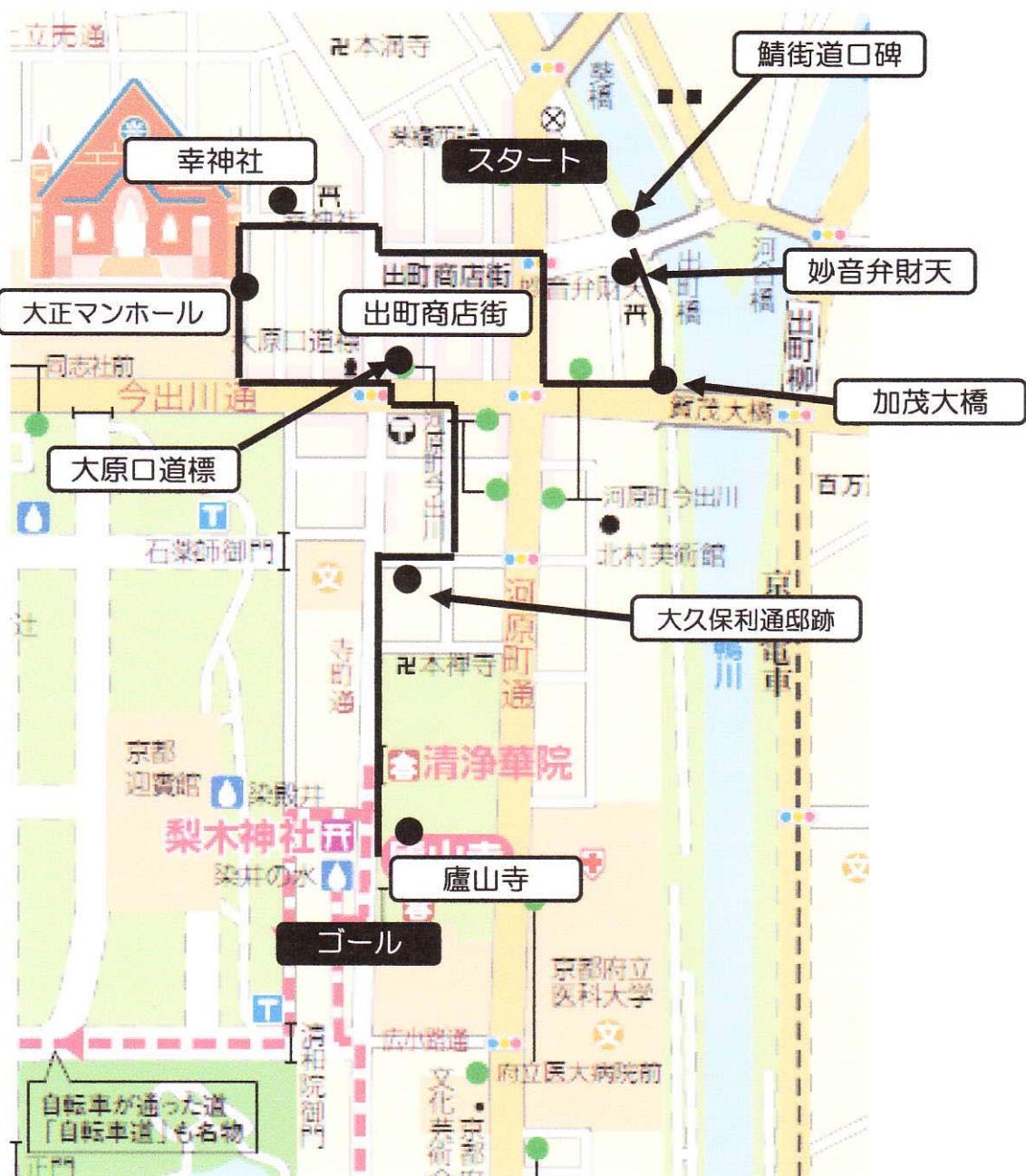


## 出町の歴史と商店街うまいものめぐり【コース地図】(上京まち歩きツアーコンテスト応募)

応募者 でまち俱楽部



### コース概要

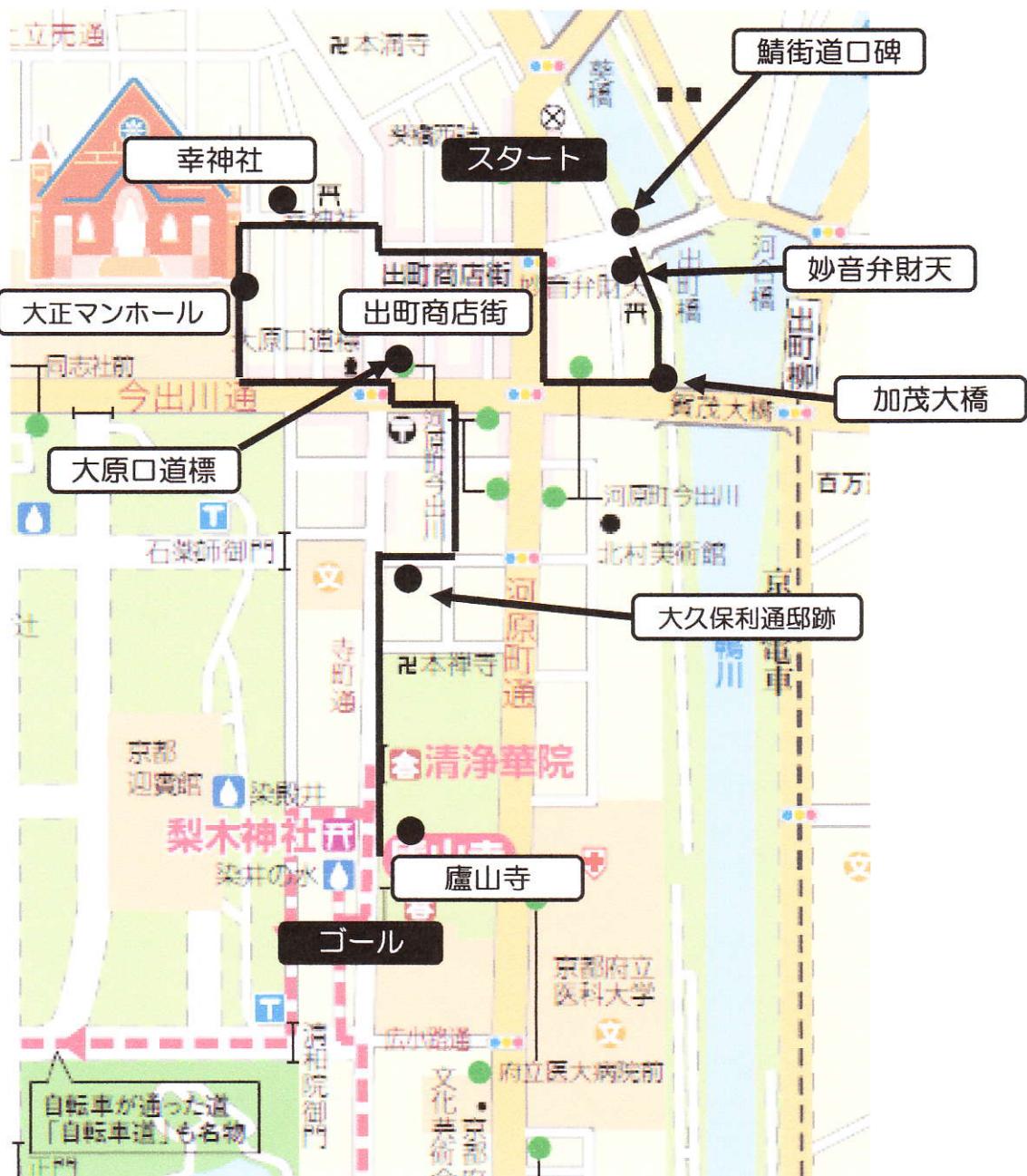
- 1 鯖街道口碑
- 2 妙音弁財天
- 3 加茂大橋
- 4 出町商店街（漬物屋さん、豆腐屋さん、呉服屋さん、乾物屋さん、果物屋さん）
- 5 幸神社
- 6 大正マンホール
- 7 大原口道標
- 8 大久保利通邸跡
- 9 卢山寺（元三大師、紫式部邸跡、御土居、慶光天皇陵）

# 出町の歴史と商店街うまいものめぐり

鯖街道口碑 → 妙音弁財天 → 加茂大橋 → 出町商店街 → 幸神社  
→ 大正マンホール → 大原口道標 → 大久保利通邸跡 → 廬山寺

【所要 165 分】

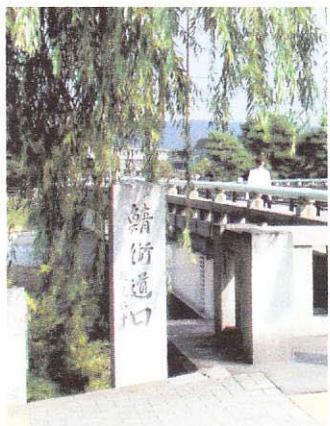
企画 でまち俱楽部  
企画協力 出町商店街振興組合



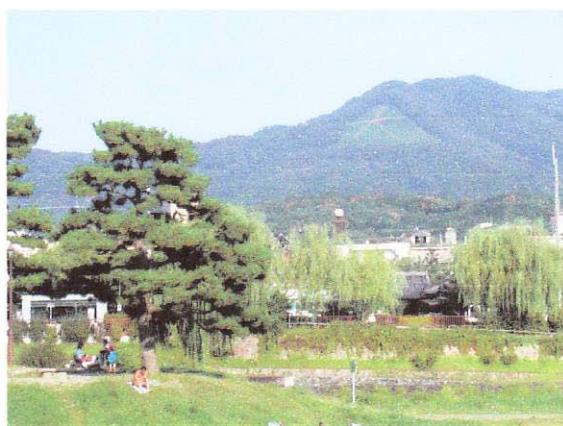
## 1. 鮎街道口碑

ここから向こうの、商店街が広がる一帯を「出町」といいます。出町は京都の北の入口に当たり、江戸時代から栄えるいわゆる市場町です。

昭和の初めごろまでの京都の町は、今よりもずっと狭く、町があったのは、北はここから少し向こうの鞍馬口通まででした。また、東も、鴨川の向こうは、下鴨村、田中村、吉田村といった農村地帯でした。つまり、出町から北も東も田んぼでしたから、出町は京都の町の東北の端っこにあたります。しかも、出町からは3本の街道が出ており、出町は京都の北の玄関口でした。今で言うと、ターミナル。北大路駅や、京都駅のような感じでしょうか。



鯰街道口碑



鯰街道口から臨む出町柳と大文字

出町から出ていた3本の街道は、若狭街道と、鞍馬街道と、山中越です。

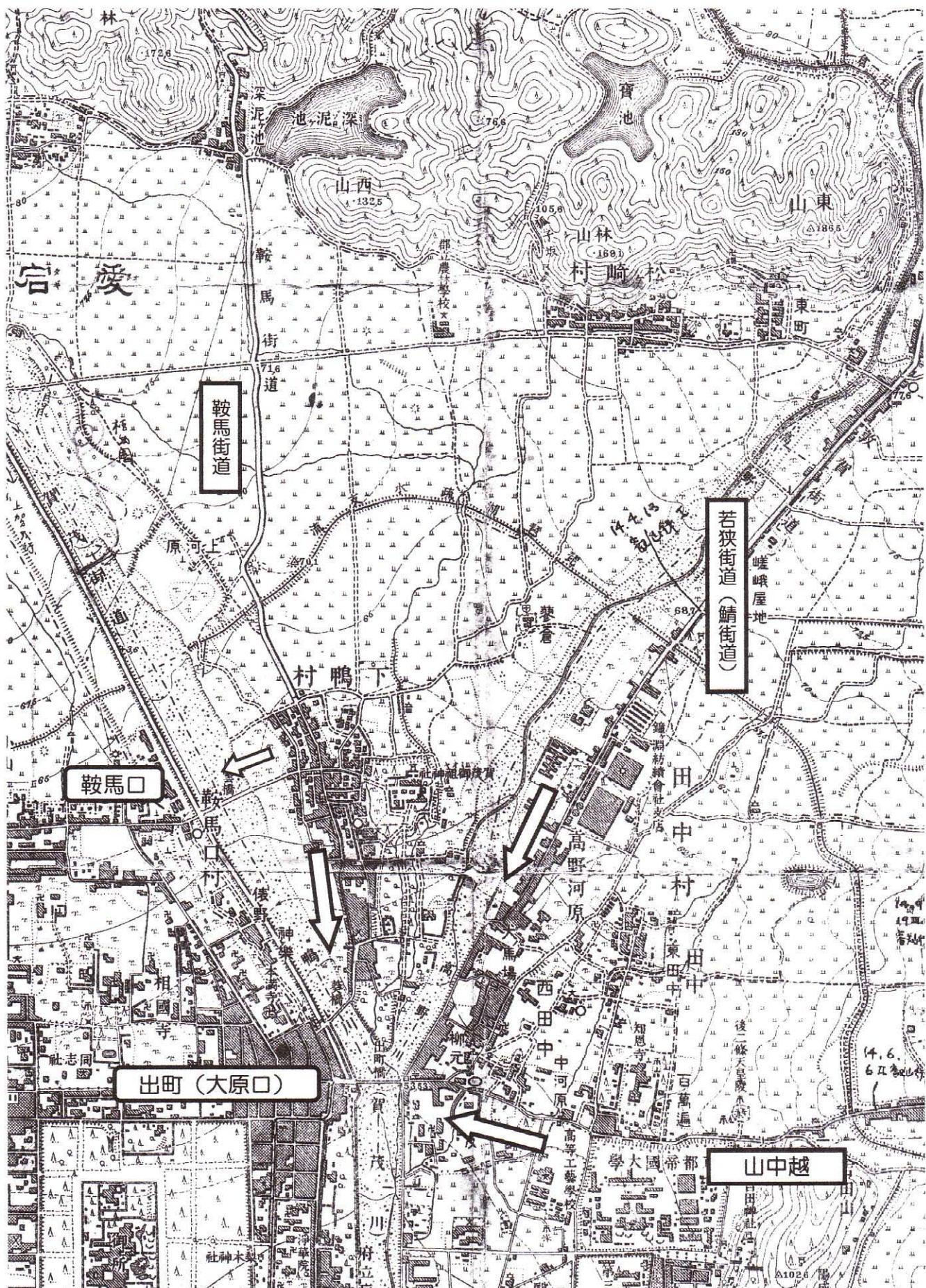
若狭街道は、八瀬・大原を越えて若狭の小浜に抜ける街道です。出町のあたりを古くは「大原口」といいましたが、ここが大原に向かう若狭街道の出発点だからです。江戸時代には、この街道を通って若狭で取れたサバが、一夜の内に京都に運ばれたので、別名を「鯰街道」といいます。今はこの名前の方が有名になりました。

ここに「鯰街道口」の石碑が立っていますが、この出町橋が若狭街道の出発地点です。ここから向こうに見える出町柳に渡り、出町柳からは高野川に沿って北上します。今も、出町柳の少し北のところからは、高野川に沿って若狭街道の旧街道が残っています。

もう一つ、ここを出発点とする街道があります。それは、山中越です。比叡山の脇を抜けて大津に抜ける街道です。三条の東海道よりも距離が短いので、歴史的にも良く利用された街道です。ここから橋を渡って、叡山電車の出町柳駅の前の道をずっと行くと、百万遍の交差点に斜めに抜けます。これが山中越の旧街道です。今の山中越えは、北の御蔭通から入りますが、昔はこちらが正面だったのです。

3番目は鞍馬街道です。これは一つ北の葵橋が出発点になります。鞍馬から花背を越えて若狭につながっている街道です。鞍馬街道も旧街道がちゃんと残っていて、今は下鴨中通とよんでいます。深泥池から真直ぐ下ってきて、下鴨神社の横で西に曲がると「鞍馬口」、曲がらずに進むと出町にやってきます。

出町と3つの街道（大正元年地図）



このような街道は、旅人が使うだけではありません。むしろ、洛北の人々が、野菜やマキなど、畑や山で取れた産物を、町に売りに来る道として重要でした。有名な大原女も、若狭街道を下ってきて、出町を通って京都の町に入っていました。そして、逆に町でしか手に入らない物を買って帰りました。出町はこのような交通の要衝であり、洛北の人たちにとってたいへん重要な場所だったのです。

ですから、明治時代に京都にチンチン電車が出来た時、2番目に出来た線路は、出町から寺町通りを通って町へ入ってゆく線でした。ここに出町橋の西側は、広場になっているのですが、ここがチンチン電車の出町橋停車場のあとです。

大正時代には、川の向こうに叡山電車が開通します。今見ると、なんでこんな中途半端なところに終点があるのかと思われるかもしれません、これは、洛北の人達が、京都の入口である出町にやってくるための電車だったのです。

出町は、このように人が集まる場所ですので、江戸時代から様々なお店があつて栄えてきました。その歴史を引き継いでいるのが出町商店街です。

## 2. 妙音弁財天

ここは、出町の商店街の人達が、守り神として大切にしている、妙音弁財天様です。

日本で、有名な弁天様といえば、琵琶湖の竹生島や、湘南の江ノ島などで、水の近くに祭られていることが多いですね。もともと、弁財天は、サラスヴァティというインドの河の神様です。この出町の弁財天も、加茂川と高野川の合流点にあって、京都の水を守っています。



ところで、弁財天はインドの神様、つまり仏教の守護神（仏様）ですから、弁財天がまつられる所は、お寺のはずです。でも、妙音弁財天の正面には鳥居があります。ここはお寺と神社のどちらなんでしょうか。正解は「お寺」です。現在、この妙音弁財天は相国寺の飛び地になっていて、入口にこそ鳥居がありますが、中には線香台があります。正面も、神社の鈴ではなく、鉢をならして拝むようになっています。

さて、弁財天は、本来は川の神様で、豊かな実りをもたらす神様です。そこで、弁財天の「才」の字は、本来は「才能」の才だったのですが、江戸時代には「財宝」の財の字を使うようになりました。つまり財宝をもたらす神様、商売繁盛の神様と考えられたのです。そして、七福神の1人に加えられました。

拝殿には、出町の人々が商売繁盛を願って奉納した絵馬がたくさん掛かっています。蛇の絵があるのは、白蛇が弁天さんのお使いだからです。拝殿の中には、江戸時代の錢を絵馬に打ち付けて、絵を作っているものがあります。おそらく、明治時代になって使えなくなったお金をを集め、商売繁盛を願って作られたものと思われます。絵馬の中には、新しいユニークなものもありますが、これは、以前ここに管理をしていた画家の田上允克さんが描いたものです。

このように、妙音弁財天は、加茂川と高野川が交わる、京都の水を守る重要な位置に祀られており、一方で商売繁盛の神様として、商店街の守り神になっています。本当に、弁天様がまつられるのにふさわしい場所におられるのですが、実はこの弁天様には700年の歴史があって、もともとこの場所にまつられていたものではありません。ここにまつられるようになったのは、半ば偶然です。もっとも、そのように言うのは信心が足らない証拠で、神様の意思で移ってこられたと考えるのが、正しいのかもしれません。

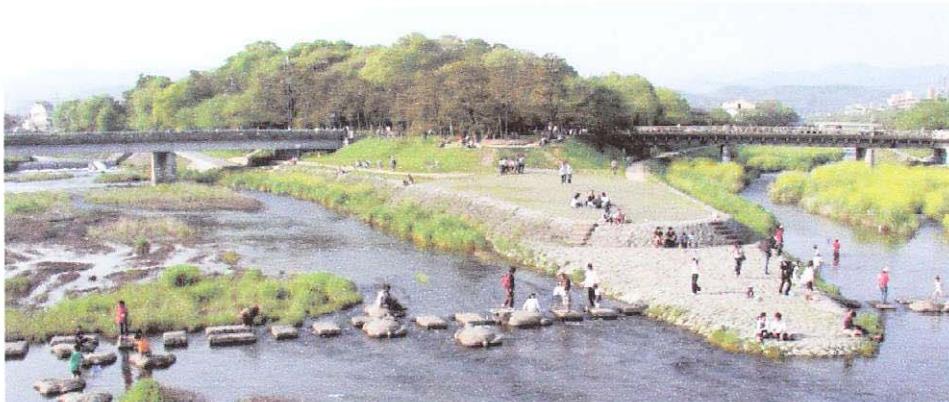
出町妙音弁財天のご本尊は、鎌倉時代の終わりごろに西園寺家のお姫様（西園寺寧子 広義門院）が後伏見天皇に嫁いだ際に、持参した「弁才天画像」です。

この「弁才天画像」は、西園寺寧子から、その子どもの光厳天皇、孫の崇光天皇を経て、伏見宮家に伝えられました。そして代々その屋敷の中にお堂を作って祀られてきました。伏見宮家のお屋敷は、最初はその名の通り伏見にあったのですが、江戸時代の中ごろの享保年間にこの出町に移ってきました。かつては、ここ南に大きなお屋敷がありました。

この画像は、明治時代に宮家と一緒に一旦は東京に移されたのですが、出町の人々がお願いして京都に帰していただき、宮家の跡地に新たにお堂を作ってお祀りしました。本堂の六角堂は、明治34年に建てられたもので、夜はライトアップされて、美しい姿が浮かびあがります。お堂の正面には、伏見宮家 22 代貞愛親王（さだなるしんのう）の筆による「妙音天」の額がかかっています。明治時代に陸軍大将を勤めた方です。

### 3. 加茂大橋と出町四橋

ここ、加茂川と高野川の合流点には、4つの橋が架かっています。今いるのが加茂大橋、三角州を挟んで両側にあるのが、左が出町橋、右が河合橋です。そして、左の出町橋の向こうに見えるのが葵橋です。このように4つの橋が揃ったのは、昭和35年で、そこにいたるまでは様々な歴史がありました（加茂大橋、出柳橋、葵橋は真ん中まで上京区、河合橋は左京区です）



加茂大橋より見る、出町橋と河合橋

明治時代以前にあった橋は2つです。一つは奥の葵橋、もう一つは手前の出町橋です。加茂大橋はまだありません。ただし、当時は三角州がもっと短くて、出町橋のあたりでは、もう川が合流していました。ですから、当時の出町橋は、加茂川と高野川をまたいで、出町と出町柳をむすぶ長大なものでした。

ここで、さらにさかのぼって、江戸時代の話をします。

江戸時代にも、橋は葵橋と、長い出町橋だったのですが、当時の橋は、そんな立派な橋ではありません。そもそも、江戸時代の鴨川でまともな橋が架かっていたのは、三条大橋と五条大橋だけです。他は仮橋と言って、中洲に板を渡して作ったそまつな橋でした。四条大橋でさえ、江戸時代はずっと仮橋でした。

出町橋は、当時は今出川口橋といったのですが、板を渡しただけの幅2メートルぐらいの橋でした。それでも、当時はここより上流にはほとんど橋はありませんでしたから、たいへん重要な橋でした。ですから、江戸時代の今出川口橋は、近くの一乗寺村、修学院村から大原のずっと奥の途中村まで、12の村でお金を出して維持していました。洛北の人々にとっては、京都の市街との交易が収入源でしたから、まさにこの橋に生活がかかっていたのです。

明治時代になって、出町橋も葵橋も本格的な橋になります。当時の出町橋は、出町と出町柳を一気に結んでいて、今の加茂大橋より長く、ただし細い木の橋でしたから、ずいぶん壯觀な眺めだったと思われます。どこかに写真がないかと探しているのですが、まだ見つけていません。

大正時代になってくると、三角州が伸びてきます。そこで大正7年に、出町橋を今のように出町橋と河合橋の2つに分ける工事が行われました。ところが、ここで事件が発生します。新しい出町橋の完成直前に、一つ北の葵橋が大水で潰れてしまったのです。しかし、新しい出町橋があるので葵橋はいらないということになりました。すると、下鴨の人たちが葵橋を再建しろと京都市に猛抗議をしてきました。そこで、新しい出町橋を、葵橋に名前を変えるということで決着がつきます。そんな訳で、出町橋はそれから40年ばかり、葵橋と呼ばれていました。



葵橋から見る出町橋



加茂大橋

ところで、大正時代には京都市の都市改造が進められました。今出川通も、このときに拡張や延長されてできた通りです。大正時代までの今出川通は細い通りで、西は新町まで、東は河原町通で伏見宮家のお屋敷に突き当たって終わっていました。当時の河原町今出川交差点はT字路で、向こうの交差点からこっちはなかったわけです。この今出川通を、幹線道路にするために、どんどん拡張し延長てきて、最後にこのお屋敷を撤去して、加茂大橋が完成して今出川通の東西貫通ができたわけです。それが昭和6年です。

加茂大橋は、武田五一という有名な建築家の設計です。武田五一は、京都大学の建築学科の最初の教授で、京都市役所や、京大の時計台のある本館などを設計した人です。この加茂大橋も、近代的なコンクリート橋なのに、欄干には石灯籠がずらりと並んでいて、なかなか斬新です。

加茂大橋が完成したすぐ後の昭和 10 年に、鴨川の大水害がありました。この水害では橋が次々に壊れ、無事だった橋は 5 つしかありませんでした。今からは想像がつきにくいのですが、当時の木造の橋は強度がなくて、増水で北山杉の材木なんかが流れてきて、橋をつぶしていったのです。加茂大橋は、コンクリートでしたので無事でしたが、葵橋こと出町橋や、河合橋は流出してしまいました。今の河合橋は、その後の昭和 13 年に出来たものです。出町橋は、そのあとも 1、2 回流れ、昭和 29 年によく今のがコンクリートの橋になりました。

最後に葵橋ですが、河原町通と下鴨本通とを繋げて南北貫通させるために、昭和 31 年に約 40 年ぶりに再建されました。最初は、市電専用橋として作られ、昭和 35 年に今の橋になりました。おかげで、出町橋も元の名前に戻りました。

今は、川に橋がかかっているのは当たり前で、洪水で流されるようなこともありませんから、ありがたみも感じなくなっています。しかし、その歴史をたどって来ると、人々が生活を支えるために、苦労して建造し維持してきたことが分かります。

## 4 出町商店街 お店巡り

出町というのは、アーケードのある柳形通、河原町今出川、寺町今出川の一帯を呼ぶ名前です。出町の地名の由来について、はっきりした記録はないのですが、洛北から京都に出てくるところ、あるいは京都から外に出てゆくところの意味で、出町というのだろうと言われています。

川の向こうに出町柳があります。そこは元々は柳の辻とか柳の茶屋と言ったところです。大正時代に叡山電車ができた時に、洛北の人が出町にでるために使う電車であることを強調するために「出町」と「柳」を引っ付けて、出町柳という名前を作ったのです。ですから、自元の人は、川の西側の出町と、東側の出町柳を厳密に区別しています。

ところが、「出町柳」が京阪電車の駅名として知られているのに対し、こちらの「出町」は正式の地名ではありません。地図にも出てきません。商店街の名前だけです。最近は、よそから来た方は、「出町」のことを「出町柳」と言う人が多いので、出町の人は内心おだやかではありません。くれぐれも、川のこちら側では「今、出町柳柳にいます」とか「出町柳商店街」などといわないようにして下さい。

出町は、江戸時代から京都の北のターミナルとして栄えてきました。ただし、京都の町中に比べると、大変変化が激しい町だったようです。出町には、江戸時代から続くお店も何店かは残っていますが、そのような古い店は、だいだいこの出町広場（出町橋西詰め）の周りにあります。

これに対して、現在アーケードがある柳形通の商店街が発達したのは大正時代です。最初に衣料品店が出来たのをきっかけに、店が並びました。

現在は、全国的に商店街と言うものがなくなっています。出町のような、日常の生活で使うものが何でも揃うような商店街は、いまでは東京、大阪、京都ぐらいにしか残っていません。その他の町では、シャッター通りや、ごく限られた業種のお店が残っているだけです。

出町は、商店街の賑わいが残っていて良いですねと言われますが、実際にはかなり大変です。昭和50年代ぐらいまでは、夕方になると買い物客がいっぱいいて、歩くのも大変なぐらいでしたが、今ではそんなことはありません。回りにスーパーもコンビニもたくさん出来ているし、人口自体が大きく減っていますからやむを得ません。

この地域の、お祭りなどの様々な行事も、消防や防犯も、商店街の人々のおかげでやってゆけます。何よりも、商店街があるので、人が町に出てくるし、町の活気が生まれます。いつもお店が空いていて周囲に目を配ってくれ、人が集まることで、町の平和が保たれているともいえます。何とか、商店街の良い部分を残し、かつ新しいことを取り入れて、商店街の賑わいが続いているなら良いと思っています。

- ※ ここで紹介するお店では、お店の人お話しを聞き、その場で京の味を味わっていただく企画が可能です（タイムスケジュールもそれを想定しています）。
- 個人的に訪れた場合も、忙しい時間帯などを除けば、お店の人から、食材の話いや、昔の商店街のお話などを聞かせていただけます。

## （1）ほんまもんの京都の味を体験！

出町商店街の魅力の1番目は、昔からの伝統的な方法で手作りされた本当の京都の味に出会えるところです。もちろん国産の材料を使い、変な添加剤は使わず、自然の素材の味を生かしたもので、料亭でかしこまつていただくようなものではなく、京都の人々が昔から食べていた庶民の味です。



漬物屋さん



豆腐屋さん

### <漬け物屋さん>

お漬物の専門店は、観光地以外では珍しくなりましたが、出町には伝統的な京漬物のお店が何軒もあります。出町は、かつては洛北で取れた野菜の集散地でしたから、ここに野菜を加工するお店が集まっているのです。

これらのお店では、工場の大量生産ではなく、一つ一つ職人さんが手作りで漬け込んだ自家製のお漬物を販売しています。それぞれのお店が、地元のお客さんに販売する他、今ではあちらこちらにファンがいて、全国各地から注文を受けるそうです。

ここ、柳川アーケードの中のお漬物屋さんは、京都やその近隣で取れた野菜を使い、糠と塩だけで漬け込んだお漬物を作っています。糠漬けが発酵食品であるということも、今では知らない人が多くなりました。糠付けは、糠を乳酸菌などで発酵させた糠床に、塩でもんだ野菜を3、4日漬け

込んで作られます。浅漬けであれば1日でできあがります。菌の作用で、独特の香りがつき、雑菌が繁殖するのを防ぎます。また、乳酸菌には、食べた後は腸の調子を良くする作用があります。

大きな工場で作られているお漬物は、調味料を使い、味つけ液などを使って、簡単に味を作ってしまうのですが、このお店では糠と塩で味をつけていますから、本当に素材の味が生きています。また、夏場ならば、あさ瓜、水なす、冬場ならば、かぶら、すぐきと言うように、その季節の野菜を使ったお漬物を作っているので、商品の変化で季節を感じることができます。

\*この先は、お店の方にお話を聞かせてもらいます。

### <豆腐屋さん>

豆腐と言うと、今では、プラスチックのパックに流し込んで固めたものしか見なくなりましたでも、昔は違いました。

出町のアーケードの中のお豆腐やさんでは、豆腐が掛け流しの大きな水槽の中に沈めてあって、買いに行くと、水の中から手で救い上げてくれます。昔のお豆腐屋さんは、どこもこうやって売っていました。ある年代以上の方にとっては、当たり前の様子ですが、30才代以下の方には、初めて見る方が多いのではないでしょうか。今は、その場でパックに入ってくれますが、ずっと昔はボールを持って買いに行つたものです。

ここのお豆腐は、この場所で、毎朝大豆を炊いて作られています。お豆腐に使っている水は、地下20メートルからくみ上げている井戸水です。昔は、豆腐の良し悪しは使用する水で決まるといわれていましたが、今の工場のお豆腐は、工業的に精製した水を使っているのだと思います。こちらのお豆腐は、本当に京都の水で作った京豆腐であり、香りや味や食感が違います。いただく時には、最初はお醤油をかけずに味わっていただければと思います。

\*この先は、お店の方にお話を聞かせてもらいます。

その他にも、出町で味わえる京の味として、鰯寿司、お菓子、お味噌などがあります。

鰯街道の終着点ということで、出町の名物として、やはり鰯寿司ははずせません。桝形アーケードの鰯寿司のお店では、日本海で取れた国産の鰯で作った鰯寿司が味わえます。このお店は、最近は雑誌などで紹介されることが多いのですが、店構えは普通の食堂で、だれでも入りやすいお店です。このあたりの、京都らしくない敷居の低さは、庶民の商店街である出町の特色です。

お菓子では、豆餅のお店が出町の名物として有名です。その他、お煎餅のお店や、阿闍梨餅のお店など、いろいろなお店があります。

## (2) 昭和の雰囲気を残すレトロなお店を体験！

出町商店街の魅力の2番目は、昔ながらの店がまえのお店が残っていることです。それも、観光地のように、いかにも作ったものではなく、自然な姿で残っています。このような、お店は今のお店のように派手ではないので、気をつけていなければ見逃します。ぜひ、出町商店街は、スタスタと通りすぎるのではなく、ゆっくり歩いて面白い物を発見して下さい。

### <呉服屋さん>

時代劇に出てくる江戸時代のお店は、今のようにカウンターや、ショーケースなどはありません。中に入ると、半分は土間で、半分は床で畳が引いてある。お客様は、床に腰掛けたり、じっくり見るのは床に上ってお店の人に商品を見せてもらう。

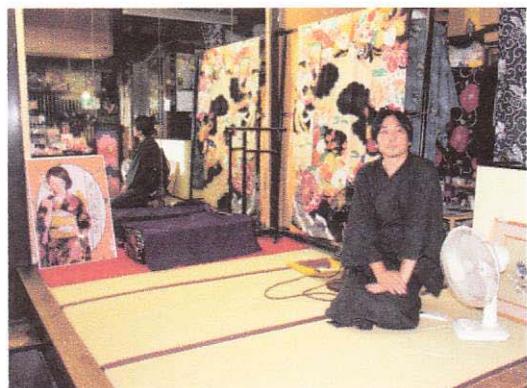
そんな、昔の店構えを守り続けている小さな呉服屋さんが、桟形アーケードの中にはあります。室町通にそんな呉服屋さんがあるのはイメージできるのですが、そのお店は、食料品店などが並ぶ商店街の中の、スーパーのまん前にあります。しかし、一歩店の中に入ると、表のアーケードの雰囲気とは格別した、別世界によるうです。

この店は、反物の状態でお客様からの御注文を受けて、着物を仕立てる、昔からの呉服屋さんの商売を続けられています。そんなに、着物を作る人がいるのかなとも思いますが、最近は京都でも、呉服屋さんが減っており、長年つきあってきお店がなくなって、そこから紹介を受けて訪ねてこられることもあるそうです。

そう聞くと、何か敷居が高くて入りにくそうですが、表にも中にも素敵な和物のグッズがたくさん並べられていて、気軽に入れるお店になっています。3年前にイケメンの4代目が店を引き継がれ、若い方にや観光客にも、立ち寄っていただいて、着物に興味を持つきっかけにして欲しいということで、伝統的な呉服屋さんでありながら、だれでも入れるお店に変えられました。

昔ながらの呉服屋さんなのに、アーケードの中にあって、気軽に立ち寄れる。この辺が、庶民の市場町である、出町らしいところだと思います。

\*この先は、お店の方にお話を聞かせてもらいます。



呉服屋さん



明治建築のお肉屋さん

河原町通にあるお肉屋さんは、明治時代の銀行の建物です。アーケードがあるので、前に行くと分かりませんが、通りの反対側から見ると良く分かります。

その並びには、昔の店構えのまま続けられている時計屋さんがあります。奥の大きな柱時計は、大正9年の創業以来、今も現役で時を刻んでいます。

こちらは、お線香のお店です。奥に飾られている巨大な和ろうそくは、高さ75cm、直径17cmあります。創業以来のお店の看板です。

### (3) 商店街ならではプロフェッショナルなお店を体験する

出町には、八百屋さん、魚屋さん、お肉屋さん、乾物屋さん、荒物屋さん、金物屋さんなど、生活に必要なあらゆるお店が揃っています。昔はどこの町のもこのようなお店があり、料理の仕方や道具の使い方なんかをそれぞれのプロフェッショナルが教えてくれました。今はスーパーとホームセンターでまとめて取り扱うようになって、ここまで揃っている商店街は、今では珍しくなりました。でも、スーパーとホームセンターは便利なのですが、なんか表面的で味気ないですね。

文具や金物なので、ちょっと珍しいものを手に入れようとして、ホームセンターになくて、出町

のお店に行ってみると、小さな店なのに、ちゃんと出でてきます。いつ仕入れたのか分からぬようなものが。そして「100円でいいよ」なんて。売れ筋の商品だけを置いているのではなく、相談されたらなんでも出してやる、と言うあたりがプロフェッショナルなお店なんでしょう。

出町商店街の魅力の3番目は、商店街ならではのプロフェッショナルなお店です。

### 〈乾物屋さん〉

乾物屋さんは、鰹節、昆布、煮干、干ししいたけといった、乾き物の食材をあつかう商売です。以前にはどこの町にでもあったのですが、現在では珍しい存在になりました。京都市内でも、数軒しかないとの事です。

出町には、アーケードの中に乾物屋さん（鰹節店）が1件残っています。今では見かけることの少なくなった珍しい品物が並ぶ様子は壯觀です。

かつては出町にも何軒かの乾物屋さんがあり、このお店も乾物の他に、様々な食料品を売っていました。しかし、今では安価な商品はスーパーが販売するようになり、このお店はスーパーなどでは手に入らない国産の高級品や、神事用の昆布や剣先など特殊な商品を扱う店になりました。京都中で乾物屋がなくなって、このような商品を探して訪ねてくる人が多くなり、特殊な商品が揃った専門店に変ってきたとのことです。

年配の方であれば、カチカチの鰹節の塊を、カンナのような鰹節削りで削ったことのある方がいるでしょう。昔は鰹節削りは子供の仕事でした。このような本物の鰹節が今、手に入りにくくなっているそうです。本物の鰹節は発酵食品です。鰹を茹でて乾燥させて荒節と言うものを作り、これに麹菌をつけて放置し、天日で干して磨くという作業を何度も繰り返して、あの鰹節の塊になります。麹菌によって乾燥と熟成をさせることで、金属のような硬い鰹節になるわけです。

しかし、現代では麹をつける前の荒節の段階で削ってしまう方法が主流と成り、麹付けを省略したもののがほとんどです。これらは、外国から鰹を輸入するか、外国で荒節まで作られているのですが、これらは国産品とは肉の質が異なり、麹を使った本物の鰹節ができません。本物の鰹節は、日本の近海で1本釣りをした鰹でしかできないのです。しかし、今はその鰹が余り取れなくなっています。手間のかかる麹付けをする人も減って、「今に本物は手に入らなくなる」と店主は言います。

出町では、金物屋さんで鰹節削りも手に入れます。本物の鰹節を味わってみませんか。そこまでという方は、お店で削った鰹節を買って下さい。これならば、そんなに高くはありません。

この店では、鰹節に限らず、ご主人が本物にこだわって全国から集めた珍しい食材が揃っています。そのあたりは、いくらでもお話ししていただけますので、一度ご主人に声を掛けてみて下さい。

\*この先は、お店の方にお話を聞かせてもらいます。



乾物屋さん



果物屋さん

## <果物屋さん>

出町で一番目立っている店は、アーケードの中の果物屋さんです。高く積み上げられ、店の前まで張出した、果物の量と色鮮やかさに圧倒されます。スーパーのようにパックをすることなく、そのまま積み上げられているので、果物の色がきれいです。

このお店の果物は、ご主人が青果市場で吟味して選んできたものです。たくさんの品物を仕入れることで問屋さんの値段で仕入れて、安く販売できるとのことです。ご主人が「若い頃に丁稚奉公して、味の見分け方を叩き込まれた」プロの目で選んでいるから、おいしい果物を、お買い得な値段で販売できるのです。

「商店街と言うのは、毎日お祭りをやっているような、楽しくワクワクするようなところなんだ。これは、日本の大切な文化であり、失ってはいけない」とご主人は言われます。そのようなご主人の思いがあって、このようなエネルギーなお店になっているのですね。

\*この先は、お店の方にお話を聞かせてもらいます。

出町はお肉屋さんもたくさんあります。寺町通のお肉屋さんは、猪肉の専門店として有名です。普段は、牛肉や豚肉を売っているのですが、冬になると猪の肉を販売します。猪は、獣師さんが取ったものが直接お店に運ばれ、このお店で解体されます。何10年も前は、朝小学生が通学する頃に、この店の前に獣師さんが運んできた猪が、そのまま転がっていました。最近は、目に付かないように運んでくるので、すぐに中に入れるのでそういうことはありません。

## 5. 幸神社

この神社の名前は、「さいのかみのやしろ」といいます。小さな神社ですが、平安時代からある大変古い神社です。今は「しあわせのかみ」と書きますが、これは当て字です。もともとの「さい」は、「しあわせ」ではなく「ふせぐ」という字を書きました。ふせぐというのは、防御の防ではなく、もっと難しい字で要塞の「塞」という字です。

塞の神、ふせぐかみというのは、道の神様です。別名を道祖神といつて、こちらの呼び方の方がなじみがあるかもしれません。昔は、悪霊や、疫病などの悪い物も、人と同じように道を通ってやってくると信じられていました。そこで、これらが入ってこないように、町や村の入口に「道祖神」をまつて、見張ってもらったのです。この風習は全国にあって、信州などでは、村々の入口に道祖神の石像や石碑が立てられている様子が見られます。

幸神社は、戦国時代より前の幸神社は、正確な場所は分からぬのですが、今の妙音弁財天のあたりにありました。つまり、若狭街道や山中越の街道から入ってくる災いを防ぐ神様だったのです。

幸神社のご祭神は、猿田彦大神です。

日本神話では、天照大神の孫であるニニギノミコトが、高天原から九州の高千穂の峰に下ったと伝えられます。これを天孫降臨といいます。今の方は、あまりご存知ないと思いますが、このニニギノミコトのひ孫が、神武天皇で、九州から奈良に移動して最初の天皇になりました。

さて、天孫のニニギノミコトが高千穂の峰に下ってくる時に、その道案内をしたのが、幸神社の祭神である猿田彦命です。猿田彦命は、分かれ道のところに立っていて、鼻が大きく、背が高く、輝く目で地上までの道を照らしていたと伝えられます。お祭の行列を天狗の面をかぶった人が先導する様子が各地に見られますが、これは正確には天狗ではなく猿田彦命です。神話にちなんで神様を案内しているのです。



幸神社



本殿軒下の鬼門除けの猿

猿田彦命には、道の神様とは別に、もう一つの信仰があります。それは縁結びの神様です。猿田彦命に会ったニニギノミコトは、お供をしていた天宇受賣命に命じその名前を尋ねさせました。そして、地上についた後は、この天宇受賣命を猿田彦と同行させました。天宇受賣命とは、天照大神が天岩戸にこもった際に、誘い出すために岩戸の前で踊った神様です。神話にははっきり書いていないのですが、二人は後に夫婦になったといわれ、合わせて、縁結びの神、夫婦和合の神として信仰されています。幸神社も、室町時代ぐらいから縁結びの神として有名になりました。だから、名前を幸いの神に変えたのです。

幸神社の右奥に、小さな鳥居があり、大きな石がまつられています。前にある石碑には「大日本最初御降臨旧跡之地 猿太彦御神石」と意味深なことがかかれていますが、この石碑の意味は分かりません。この石神さまも、縁結びの願いをかなえてくれる石として、信仰されていて、室町時代に作られた「石神」という狂言に出でてきますから、大変歴史があるものです。

この奥に、木彫りの猿がいます。これは、都の鬼門よけとしてまつられたものです。鬼門というのは「鬼の門」と書きます。陰陽道では、東北の方角を鬼門と呼んで、悪いものが進入してくる方角と考えます。都の鬼門は、比叡山が護っているのですが、この神社も都の東北にあたることから、比叡山のお使いである猿を、鬼門よけとしてまつったものです。御所の猿ヶ辻にも、同じ形をした木彫りの猿がまつられています。

## 6. 大正マンホール

約 100 年前の、大正 5 年（1916）に作られたマンホールの蓋です。上京区の大正時代のマンホールが見られることは、昭和 61 年にマンホール研究家の林丈二さんによって発見されました。その結果は、路上観察学会が発表した「京都路上ウォッチング」という本に載っています。しかし、この本に載っているマンホールは、現在ほとんど撤去されてしまいました。マンホールは文化財とは見てもらえなかつたようです。このマンホールは、現在、京都でいちばん古いマンホールと思われます。



この大正時代のマンホールには、大きな謎があります。それは、京都で下水道が作られたのが大正 12 年からで、記録上では大正 5 年にマンホールがあるはずがないのです。誰がどのような経緯でこれらを作ったものか、全く分かっていません。

## 7. 大原口道標

京都には、7つの出入口があってこれを「京の七口」と言います。出町も、「大原口」の別名があって「京の七口」の1つです。

もっとも、「京の七口」の候補は、10 いくつあります。7 というのは、昔は日本を7つのブロックに分けていましたから、全国と言う意味で言っているのだと思われます。本当に、入口が7つしかなかったわけではありません。

そんなわけで、七口の組み合わせは色々ありますが、比較的一般的な7つの組合せを言うと、こんな感じです。

**大原口**は、いわゆる出町で、大原を越える若狭街道、つまり鯖街道の出入口です

ここから少し北に行くと、**鞍馬口**があって鞍馬街道の出入口です。これは、鯖街道口のところでお話しました。

**粟田口**は、三条大橋のところで、東海道の出入口です

**五条橋口**は、五条大橋のところで、伏見街道、今の本町通の出入口です

東寺のそばに**鳥羽口**があって、淀の港にゆく鳥羽街道の出入口です。摂津から西国に向かう西国街道もこのあたりからです。

**丹波口**は、JR の駅や青果市場があるところで、山陰道の出入口です

最後に、千本北大路の当たりに**長坂口**というのがあって、鷹峯から周山に抜ける街道です。

ここにある道標は、幕末の慶応 4 年に立てられたもので、京都の史跡に指定されています。この当たりを大原口町といいますので、「大原口の道標」と呼ばれています。若狭街道や他の街道からやってきた人に、京都の名所などの方向を示しています。当時、どんなところが名所と考えていたのかが分かります。

西側には、金閣、北野、御室など、南側には、清水などがあります。今の観光地とあまりかわりません。ただし、いくつか分からぬものもあって「六条」なんていうのは、なぜ入っているのか分かりません。

また、良く見ないと分からないのですが、一番下には、この道標を立てるときに寄付をしたお店の名前がすらりと載っています。当時の出町の代表的なお店だったと思われるのですが、現在は1軒も残っていません。かろうじて、ここにある丹波屋



安兵衛さんは、建物だけが残っていて、今は同志社大学が借りて「でまち家」という学外施設になっています。出町は、京都の中でも町の端っここの市場町でした。だから、たいへん人の出入りが多く、お店の栄枯盛衰が激しかったのです。このあたりは、京都の中心部とは異なるところであります。出町の自由な雰囲気ができた理由だと思われます。

## 8. 大久保利通邸

幕末の慶応三年（一八六七）十月十四日、江戸幕府の十五代將軍徳川慶喜は、土佐藩の提案を受け入れて、大政奉還を発表します。ただし、名目では大政を返すなどと言っていても、徳川慶喜も権力を手放す気は、全くありませんでした。実際には、大政奉還の後、天皇の下に、徳川慶喜を中心とする新政府を作る計画で、有力大名も、主要な公家もこれを支持していました。

これに対し、徳川から実権を奪い取ろうと、薩摩藩の大久保利通や公家の岩倉具視が起こしたのが「王政復古のクーデター」です。十二月九日に、薩摩藩や土佐藩が御所を封鎖して、明治天皇の名前で新政権を発足させ、政権メンバーをきめてしまいました。薩摩藩と下級の公家が結んで、勝手に自分たちを中心とする政権を作ったのですから、かなり無茶苦茶です。明治維新は、このクーデターで勝敗が決まったといえます。



その「王政復古のクーデター」の首謀者である大久保利通が、当時住んでいたのが、この場所です。当時の薩摩藩邸は今の同志社大学のところにあり、この出町には、西郷隆盛や黒田清隆などの主に薩摩藩の勤皇志士が拠点を構えていました。出町は、人の出入りが激しい町で、勤皇志士が潜むのに良い場所だったのだろうと思われます。桂小五郎、坂本龍馬なども、やはり町の中ではなく、木屋町近辺など、人の出入が多いところに潜んでいました、

ここの大久保邸は、討幕派の作戦基地の一つで、様々な秘密会議が行われた場所です。王政復古のクーデターの三日前の十二月六日にも、ここで作戦会議が開かれました。この大久保邸跡には、現在も当時の茶室（有待庵）が残されていますが、百五十年前の建物で痛みがひどく、維持が難しい状態とのことです。

## 9. 廬山寺

ここ廬山寺は、今は紫式部の屋敷跡として知られていますが、紫式部で有名になったのは昭和になってからです。中世や江戸時代の廬山寺は、元三大師の信仰で有名でした。また、廬山寺には、豊臣秀吉が作らせた御土居の一部が残っています。この御土居は、京の七口と関係があります。

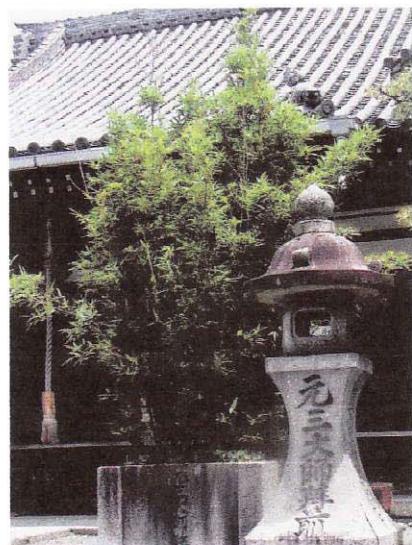
今回のウォーキングの最後は、ここ廬山寺で、平安時代から現在までの出町周辺、すなわち平安京の東北の角っここの歴史をたどります。

### <元三大師>

この正面のお堂は、大師堂といいます。お堂にまつられているのは、元三大師です。

元三大師は、平安時代中ごろのお坊さんです。本名を良源といつて、正式の大師号は、慈恵大師ですが、1月3日に亡くなつたことから、一般には元三大師と呼ばれます。

比叡山で一番偉いお坊さんを天台座主といいますが、この元三大師は、低い身分の出身だったのですが、大変才能がある方で、第18代目の天台座主を勤めました。当時、火災で荒れていた建物を復興し、僧兵の規律を正し、学問も盛んにするなど、



あらゆる面で活躍し、比叡山中興の祖と呼ばれています。

元三大師は、実際の歴史上でもそのような功績があるお坊さんなんですが、鎌倉時代以降、民間信仰では、不思議な靈力で、悪い物を祓ってくれる大師様として信仰されるようになりました。

このお堂には、元三大師の木像がまつられているのですが、それはなんと鬼の姿をしています。50cmくらいの、正座をした鬼の像で、般若の顔をしていて、大きな角が生えています。秘仏ですが、節分の時には御開帳されます。廬山寺のホームページに写真が載っていますので一度見て下さい。本当に鬼の像です。

なぜ、元三大師が鬼の姿なのかというと、それには伝説があります。元三大師があるとき祈祷をしていると、厄神がやってきて邪魔をするので、試しに小指の先にその厄神を取り付かせたところ、全身に痛みが走り高熱が出てきました。そこで、元三大師は鬼の姿に変わって、厄神を追い払ったということです。鬼の姿は、その時の様子をあらわした物です。

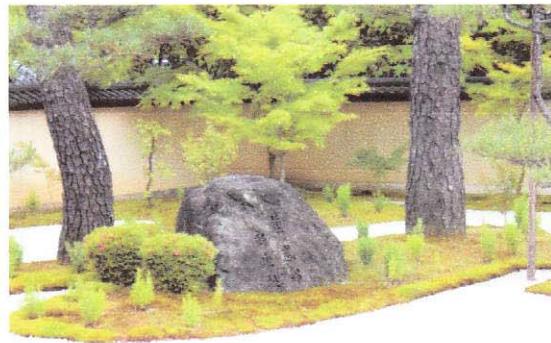
このように、元三大師は厄を追い払ってくれるということで、鬼の姿の元三大師の絵を門に入つておくと悪い物を入ってこないという信仰があります。廬山寺の拝観受付のところで売っていますので、良かったら求めて下さい。

### <紫式部と大式三位>

紫式部のひい爺さんに藤原兼実と言う方がいて、この方の別名を堤中納言といいます。何で「堤」かというと、この方は、東京極大路つまり今の寺町通と、加茂川の堤防の間にお屋敷を持っていたからです。その堤中納言のお屋敷があったのが、この廬山寺の場所です。この堤中納言の子孫は、あまり出世しなくて、泣かず飛ばずだったのですが、代々このお屋敷に住んでいたようです。紫式部もここで育ち、後にはここで一人娘を産んだと推定されています。



紫式部・大式三位 歌碑



源氏の庭

この廬山寺と紫式部の関係が分かったのは、実は、昭和に入ってからです。ずっと言い伝えられてきた話ではありません。それまでは、この場所は、紫式部ではなくて、和泉式部が住んだ跡だと言われていました。和泉式部は、歌人として、また恋多き女性として有名で、一時期は紫式部と同じ中宮藤原彰子にも仕えました。廬山寺は、この和泉式部から紫式部に乗り換えたわけです。

平安時代、この付近には、中宮彰子が建てた東北院というお寺がありました。和泉式部は、晩年をこの東北院で過ごしました。能に「東北」という演目があって、これは東北院を訪ねてきた旅の僧侶が、梅ノ木の下で和泉式部の靈と合う話なのですが、以前はこの話がずいぶん有名だったようです。京都のあちらこちらに、東北院にゆかりの史跡があります。廬山寺も、以前は東北院の跡

だといっていました。お墓の方に、雲水の井という古い井戸があって、東北院にあった井戸だったと伝えられています。

しかし、昭和に入って、有名な古代史学者である角田文衛博士が研究された結果、実際の東北院はもう一区画北で、ここはその隣にあった堤中納言の屋敷であり、紫式部が住んでいたところだと判明したのです。

源氏の庭は、この地が、紫式部の屋敷跡に当たることにちなんで作られた庭で、庭の中心の石には、角田文衛博士の筆で「源氏の庭」と書かれています。桔梗の花の名所として知られており、初夏には庭中に桔梗の花が咲きます。

ここにあるのは、紫式部と、娘である大式三位（だいにのさんみ）の歌を刻んだ歌碑です。

紫式部は、若い頃にかなり年上の貴族と結婚し、娘が1人生まれました。当時は通い婚で、子供は母親の実家で育てられましたから、娘の大式三位も、ここで育てられたと推測されています。ご主人はすぐに亡くなりましたが、紫式部は、その後一条天皇皇后の藤原彰子の女房として使え、源氏物語や紫式部日記を残すことになります。

一方、娘の大式三位の方も、18才で母親の後を継いで藤原彰子の女房を勤めました。その後、藤原彰子の甥に当たる親仁親王の乳母を勤め、この皇子が後冷泉天皇になったので、従三位という高い位をもらいます。夫が太宰大式と言う役職にあったので、合わせて大式三位といいます。紫式部は、本名が分かっていないのですが、娘の方は位が高くなつたので、藤原賢子と言う名前が分かっています。紫式部と大式三位（だいにのさんみ）は、いずれも小倉百人一首に入っていて、ここに刻まれているのも百人一首の歌です。

### <豊臣秀吉と御土居>

京都の町は豊臣秀吉によって大きく改造されました。豊臣秀吉は、京都を高さ5メートル以上の土壘で囲みました。それを、御土居と呼びます。

そもそも、京都は防衛ラインが全くない、とても無防備な町でした。戦国時代の織田信長以前の京都は、様々な大名が、足利将軍の一族の誰かを連れてきて将軍に据えて、次々に政権を打ち立てました。しかし、防衛ラインがないので、他の誰かが大群で攻めてくるとすぐに逃げ出し、新しい政権ができるということを繰り返していました。足利幕府自体が、何度も逃げ出していく、滋賀県の山の中の朽木村に、5年間幕府が移転していたこともあります。そして、最後に攻めてきて、京都を占領したのが織田信長です。そんな状況ですから、豊臣秀吉も政権をとったからといって安心しているわけにはゆきません。そこで、京都を外的から防衛するために作ったのが御土居です。

ただし、全く出入りできないと困ります。京都からなる各街道の出発点のところに、御土居の出入口が作られ、それが先ほど道標のところで説明した「京の七口」だという説があります。

御土居は、昭和の初めまでかなりの部分が残っていました。明治・大正時代の地図を見ると、土壘がぐるっと京都を囲んでいる様子が見えます。ところが、昭和に入ってからは、どんどん壊されて、今はところどころに断片が残っているだけです。

寺町通のお寺は、もともと御土居の管理の役目がありました。要するに、寺町通と御土居の間にお寺が建っていました。お寺の正面が寺町通で、裏が御土居、御土居の向こうは河原だったのです。しかし、寺町通の御土居は、江戸時代からどんどん壊されて、今、お寺の裏にはっきり残っている御土居は、この廬山寺だけです。ただし、高さは元の半分以下になっています。また、御土居の向こう側には堀が掘られていたはずです。



御土居



慶光天皇陵

#### <慶光天皇と尊号事件>

ここは、慶光天皇（きょうごうてんのう）の御陵です。この慶光天皇という方は、実際に天皇の位についた方、いわゆる歴代天皇ではなく、死後に天皇の名を送られた方です。

皇室の歴史をずっと見てくると、時々、本家の跡継ぎがいなくなって、分家である宮家から猶子を迎えていることがあります。江戸時代後期にも、本家の血筋が絶えたことがあって、閑院宮家から猶子を向かえて光格天皇となりました。

この光格天皇の実のお父さんは、閑院宮家2代目の典仁親王（すけひとしんのう）と言う方です。しかし、天皇のお父さんであっても、ただの親王だと、あまり身分が高くないのです。そこで、光格天皇は、お父さんを特別に太上天皇の位に付けようと考えました。太政天皇というのは、いわゆる「上皇」で、天皇を辞めた方がつく位です。典仁親王は、もちろん天皇にはなっていないのですが、名誉職として太上天皇にしようとしたのです。このようなことは歴史的によくあることです。

ところが、その時の幕府の老中である松平定信がこれに反対し、さらに公家の中で運動が盛り上がりると、運動した公家を処罰するという、大事件となってしまいました。これを「尊号事件」と言います。明治維新に向けて、幕府と朝廷の間がくすぶり始めた頃にあった事件です。

結局、この時には天皇の願いはかなわず、典仁親王にはただの親王のまま亡くなりました。しかし、明治時代に入ってから太政天皇の位と慶光天皇の名前が贈られました。

ここの一郭は、閑院宮家の代々のお墓で、まん中が2代目の典仁親王、つまりの慶光天皇の御陵です。ところで、天皇と皇后のお墓を「陵」、訓読みでは「みささぎ」といいます。その他の方は、皇族でも「墓」と呼びます。典仁親王は亡くなった後で天皇になりましたから、その時に、お墓も正式の天皇陵になりました。江戸時代の天皇陵は、すべて東山の泉涌寺に作ることになっていたのですが、そのような経緯で、江戸時代の天皇陵としては、唯一泉涌寺以外の場所にあります。

それでは、このツアーの最後に、本堂にお参りして、源氏の庭を堪能して下さい。